

卒 業 論 文

異文化感受性発達モデル（DMIS）と翻訳技法を接続するモデルの構築
ー夏目漱石『こころ』英訳を対象にー

学籍番号 J2200156

氏 名 矢沢 柊

指導教員名 吉川 正人 准教授

令和 8 年 1 月 25 日 提出

概要

本研究は、夏目漱石の『ころ』第一部を対象に、文化的要素（その文化の生活様式や価値観を含む語や表現）が翻訳を通じ、読者にどのような異文化理解をもたらすのかを明らかにすることを目的とする。従来の翻訳研究では翻訳の方法論については論じられてきたが、技法選択が読者の異文化理解の到達度にどう結びつくかを、再現可能な形で示す枠組みは不足していた。

本研究では 152 件の文化的要素を抽出し、近藤いね子訳と Edwin McClellan 訳の計 304 事例を対象に分析を行った。分析手法として、Molina & Albir の翻訳技法分類と、Bennett の「異文化感受性発達モデル (DMIS)」を統合・再定義した独自のモデルを用い、各翻訳事例を分類し、統計的分析を実施した。

分析の結果、多くの翻訳事例が、異文化を自文化の枠組みの中で「差異はない」と解釈させる段階に集中していることが明らかになった。一方で、特定の翻訳技法と異文化理解の段階との間に強い一対一の相関が見られた。具体的には、「要素の削除」は異文化の存在を認識しない段階、「原語の借用」は差異があることは認識するが深い理解には至らない段階、「加筆や注釈」は異文化の視点に立って深く理解する段階を導くことが示された。

小説翻訳では物語への没入感維持のため、読者が自文化の枠組みで処理しやすい技法が優勢になりやすい。反面、深い理解を促す「加筆や注釈」は情報量や視線移動を増やし読書を中断しうるため、「読みやすさ」と「異文化理解」の間にトレードオフが生じる。実際に翻訳者間の比較では、両訳の全体の分布に統計的有意差は認められなかったが、個別の記述的特徴に注目すると、近藤訳は加筆や注釈で深い理解を促す傾向が見られた一方、McClellan 訳は要素を削除し読みやすさを優先するという、トレードオフの使い分けの傾向が見られた。

また、技法上は等価とされる翻訳であっても、実際にはありのまま伝わらず、読者が自文化の枠組みに引き寄せて処理してしまう現象が生じていることが判明した。本論文は、目標とする異文化理解の段階から適切な技法を決定するフレームワークを提示し、翻訳技法を読者の認知状態を調整する機能的なツールとして位置づけるものである。

目次

1. はじめに.....	1
2. 背景.....	2
2.1 文化的要素に関する研究.....	2
2.2 翻訳技法に関する研究：Vinay & Darbelnet の分類と Molina & Albir の 18 分類	3
2.3 異文化感受性に関する研究：Bennett の異文化感受性発達モデル（DMIS）	3
2.4 本研究の独自性.....	4
3. 分析方法.....	5
3.1 分析対象.....	5
3.1.1 対象テキスト	5
3.1.2 対象作品および媒体の選定根拠.....	5
3.1.3 翻訳テキストの選定根拠.....	6
3.1.4 分析範囲の設定.....	7
3.2 分析データの構成.....	7
3.2.1 文化的要素の抽出基準.....	7
3.2.2 分析データの量的規模.....	8
3.3 分析的枠組みの定義.....	9
3.3.1 Molina & Albir (2002) の翻訳技法分類の再定義	9
3.3.2 Bennett (1986; 1993) の DMIS の再定義.....	12
3.4 分析手順.....	14
3.4.1 文化的要素の抽出とコーパスの構築.....	14
3.4.2 翻訳技法の判定	14
3.4.3 DMIS（読者の異文化理解段階）の判定	15
3.4.4 クロス集計と相関関係の検証.....	15
4. 結果.....	16
4.1 全体的な傾向.....	16
4.1.1 翻訳技法の割合	16

4.1.2 DMIS の割合	17
4.2 クロス集計分析と統計的傾向	19
4.2.1 翻訳技法と DMIS の分布傾向（クロス集計結果）	19
4.2.2 翻訳技法×DMIS の統計的有意性（調整済み標準化残差分析）	21
5. 考察	22
5.1 戦略（DMIS）と戦術（技法）の翻訳フレームワーク	22
5.2 Minimization の多さから読み取れる文学翻訳の性質	24
5.3 Established Equivalent の機能と「等価の幻想」	25
5.4 翻訳技法の選択に見られるアプローチの差異	26
5.5 「読みやすさ」と「異文化理解」のトレードオフ	27
6. 結論	27
6.1 研究の総括	27
6.2 本研究の理論的貢献	28
6.3 今後の課題	28
参考文献	29
付録: 『こころ』第一部の文化的要素とその翻訳・翻訳技法・DMIS の一覧	30

1. はじめに

近年、機械翻訳技術の急速な発展により、言語間の表面的な変換は容易に行えるようになった。一方で、瀬上 (2018) は機械翻訳には限界が存在し、文脈や文化的背景をくみ取った創造翻訳こそが、人間による翻訳の役割であると指摘している。例えば、スクウェア（現スクウェア・エニックス）が 2001 年に発売したロールプレイングゲーム FINAL FANTASY X（ファイナルファンタジー10）において、攻撃用のアイテム「風林火山」が単なる単語の羅列ではなく、「Conqueror（征服者）」と訳されているが、このような事例は、置き換えを超えた、翻訳者の解釈と裁量が介在する作業になっていると言える。近年の AI 技術の進展は目覚ましいが、文化的な背景を扱う文学翻訳において、人間の翻訳者がどのような意図（戦略）を持って訳出しているかを解明することは、依然として重要な課題である。

翻訳学の領域では、翻訳がいかなる行為であるかについて多くの議論が重ねられてきた。そのアプローチの一つとして、翻訳における言語操作を体系化した「翻訳技法」の分類が存在する。かつては Vinay & Darbelnet (1958/1995) による 7 分類が多くの研究の基盤となっていたが、近年では、より機能的な側面に焦点を当てた Molina & Albir (2002) の 18 分類が、翻訳分析におけるデファクトスタンダードとして定着している。

こうした技法論に対し、Reiß & Vermeer (1984; 2014) は、翻訳を単なる言語変換ではなく、明確な目的（Skopos）を持った「意図的な行為」として再定義した。このいわゆるスコポス理論は、翻訳をその目的に従う行為とみなし、訳文の評価基準を原文との等価性よりも、設定された目的への適合度を求める機能主義的アプローチである。

しかし、スコポス理論は「翻訳には目的（Skopos）が必要である」という枠組みを提示したものの、「目的」を実際のテキストレベルの「技法」へと落とし込むための具体的なプロセスについては、翻訳者の裁量というブラックボックスに残されたままである。特に「読者に異文化をどの程度感じさせるか」という心理的な深さを、どのような翻訳技法を用いて制御すべきか、という定量的・実践的な指標は、従来の機能主義的なアプローチだけでは十分に説明しきれない。

翻訳が異文化間のコミュニケーションである以上、翻訳の「意図」の根底には、読者に異文化をどのように認識させるかという視点が含まれているはずである。したがって、このブラックボックスとなっている意図を解明するには、翻訳学の枠組みを超え、Bennett (1986; 1993) が提唱する「異文化感受性発達モデル（DMIS）」など、異文化との接触に関する心理学的な異文化コミュニケーションモデルを導入する必要がある。

そこで本研究では、この異文化感受性発達モデルを翻訳行為の分析に応用する可能性に着目する。翻訳者が原文の文化的要素を訳出する際、読者に対してその要素をどの程度の深さで受容させたいか（DMIS のどの段階を体験させたいか）を決定し、その決定に基づいて特定の翻訳技法を選択しているのではないか。この仮説に基づき、翻訳者の頭の中にある「意図（戦略）」と、テキスト上に表出された具体的な「技法（戦術）」をつなぐ論理的な関

係性を明らかにすることが、本研究のゴールである。

2. 背景

2.1 文化的要素に関する研究

翻訳における文化的要素とは、起点言語の文化の特有の生活様式やその表象であり、目標言語に存在しない、あるいは異なる地位を持つため、翻訳時に特別な配慮を要する言語・非言語的な項目を指す。例えば、日本の「畳」は、単なる床材ではなく、部屋の広さを測る単位であり、靴を脱ぐ生活様式を前提とした文化固有の要素であるため、これを持たない文化圏の言語への翻訳では単語の置き換え以上の工夫が求められる。翻訳学の領域では、こうした文化的要素の分類と翻訳処理の枠組みを明確にするために、文化的要素の定義とそのカテゴリ化が繰り返し試みられてきた。

文化的要素の定義として広く参照されるのが、Newmark (1988) の枠組みである。Newmark (1988) は、文化を「特定の言語を表現手段とする共同体に特有の生活様式とその表象」と定義したうえで、翻訳の対象となる「文化的語彙 (cultural words)」を 5 つのカテゴリに分類している。そのカテゴリを表 1 に示す。表中のカテゴリ名および基本区分は Newmark (1988) に基づく。説明は原文の例示を踏まえて整理したものである。

表 1 Newmark (1988)の文化語の 5 つの分類

カテゴリ	概要	例
生態 (Ecology)	植物、動物、風、山、平野、自然現象など、自然環境に由来する語彙。	桜、梅雨、台風、秋の七草
物質文化 (Material culture)	食べ物、飲み物、衣服、住居、都市、交通・通信手段など、物質的な文化を表す語彙。	味噌、浴衣、障子、人力車
社会文化 (Social culture)	労働、余暇、娯楽、スポーツなど、社会生活における活動を表す語彙。	花見、盆踊り、銭湯
組織、習慣、活動、手順、概念 (Organizations, Customs, Activities, Concepts)	政治・行政・宗教・芸術などの制度、慣習、行事、手続き、概念を表す語彙。	天皇、義理、仏教用語、元号
身振り、習慣 (Gestures and habits)	身振り、習慣、日常的な行動様式を表す語彙。	お辞儀、正座、手招き

この分類は、文化的要素を「何が文化に特有か」という観点から体系的に捉えるものであり、翻訳者が「何を文化的要素として扱うべきか」を判断するための基準を提供する。本研

究では、文化的要素の抽出および分析の基盤として、Newmark (1988) のこの 5 分類を採用する。なお、本研究における具体的な抽出基準や、『こころ』のテキストに対するカテゴリの適用方法については、3.2.1 項にて記述する。

2.2 翻訳技法に関する研究：Vinay & Darbelnet の分類と Molina & Albir の 18 分類

翻訳がいかなるプロセスを経て行われる行為であるかを分析するため、翻訳学の領域では古くから翻訳技法の体系化が試みられてきた。本節では、古典的なモデルである Vinay & Darbelnet (1958/1995) の分類と、より現実的・機能的に分類した Molina & Albir (2002) の分類について概説し、本研究が後者を採用する根拠を述べる。

翻訳技法の分類として最も著名かつ古典的なものは、Vinay & Darbelnet (1958/1995) による 7 分類である。彼らは、フランス語と英語の比較文体論に基づき、翻訳の手法を「借用 (Borrowing)」、「語義借用 (Calque)」、「直訳 (Literal Translation)」からなる直接的翻訳 (Direct translation)、「転換 (Transposition)」、「調整 (Modulation)」、「等価 (Equivalence)」、「翻案 (Adaptation)」からなる間接的翻訳 (Oblique Translation) に分類した。このモデルは、翻訳という行為を芸術や直感の領域から、体系的な言語学的な分析へと引き上げた先進的な研究であり、今日でも翻訳教育や理論の基礎として広く参照されている。

しかし、Molina & Albir (2002) は、Vinay & Darbelnet (1958/1995) の分類が言語構造の対照に重点を置きすぎており、文脈によって変化する翻訳の動的な機能を十分に捉えきれていないと指摘している。こうした課題に対し、Molina & Albir (2002) は、Vinay & Darbelnet (1958/1995) をはじめとする既存の分類を包括的に再検討・整理し、18 の翻訳技法分類を定義した。Molina & Albir (2002) のモデルは、翻訳技法を「翻訳されたテキストを分析するためのツール」として明確に定義したことで、翻訳の質を客観的に評価したり、大量の翻訳データを分析したりする際の共通の物差しを提供した。

本研究は、「戦略 (DMIS) × 戦術 (翻訳技法)」の実践的なフレームワークを構築することを目的としている。このとき、戦術が具体的であればあるほど、フレームワーク使用時の有用性は高まる。そのため、戦術の分類として、Molina & Albir (2002) を採用する。彼らの分類は「削減 (Reduction)」や「増幅 (Amplification)」といった情報の増減に関する技法、「一般化 (Generalization)」や「具体化 (Particularization)」といった抽象化・具体化の変換に関する技法が含まれており、これらはフレームワークを使用する翻訳者により細かい指針を示すことを可能にするためである。なお、このモデルは本研究の目的にそぐわない分類も含まれているため、分析にあたっては一部を除外・調整して適用する。具体的な分類項目および除外の基準については、3.3.1 項にて詳述する。

2.3 異文化感受性に関する研究：Bennett の異文化感受性発達モデル (DMIS)

翻訳を異文化間のコミュニケーション行為として捉えるならば、翻訳者が原文の文化的要素をどのように認識し、それを読者にどう伝えようとしたかという「異文化受容」の側面を無視することはできない。この異文化受容のプロセスを体系化したモデルとして、Bennett

(1986; 1993) が提唱した「異文化感受性発達モデル (The Developmental Model of Intercultural Sensitivity, DMIS)」が挙げられる。

DMIS は、人々が異文化に直面した際、その差異をどのように解釈し、対応していくかという心理的な発達段階を示したモデルである。Bennett (1986; 1993) は、異文化に対する認識を「自文化中心主義 (Ethnocentrism)」から「文化相対主義 (Ethnorelativism)」へと至る 6 つの段階として定義した。初期段階である「自文化中心主義」には、文化的差異を認識しない「否定 (Denial)」、差異を脅威とみなす「防衛 (Defense)」、差異を表層的なものとして矮小化する「最小化 (Minimization)」が含まれる。一方、発達した段階である「文化相対主義」には、差異を尊重する「受容 (Acceptance)」、異文化の視点を取り入れる「適応 (Adaptation)」、そして複数の文化的視点を自己に統合する「統合 (Integration)」が含まれる。

従来、DMIS は異文化コミュニケーション教育や個人の適応能力を測定するための指標として用いられてきた。しかし本研究では、このモデルを「翻訳者の個人的な能力」を測るためではなく、「翻訳者が読者に対して、原文の異文化性をどの程度の深度で体験させようとしたか」という、翻訳戦略を測るための指標として再解釈し、応用する。なお、本研究ではオリジナルの 6 段階のうち、分析に適した 4 段階を抽出して適用する。採用した 4 段階の定義および 2 段階を除外した理論的根拠については、3.3.2 項にて詳述する。

2.4 本研究の独自性

以上の先行研究の概観を踏まえ、本研究の独自性は、異なる分野の理論を統合した新たな分析フレームワークの構築と、それに基づく定量的な実証分析にある。

前節までに述べた通り翻訳研究における Molina & Albir (2002) の翻訳技法分類モデルは、テキスト上で確認できる具体的な操作を記述する事に長けている。一方で、Bennett (1986; 1993) の DMIS モデルは、異文化に対する心理的な構えを説明する仕組みである。従来、これらは別個の領域で扱われてきたが、本研究は DMIS を「翻訳者の能力」ではなく「読者への異文化揭示戦略」として再解釈することで、両者を接続する。すなわち、翻訳者の頭の中にある抽象的な「戦略 (読者にどこまで異文化を感じさせるか)」が、具体的な「戦術 (どの翻訳技法を選択するか)」としてどのように具現化されるのか、その論理的な関係式を解明する点に、本研究最大の独自性がある。

また、本研究では、Newmark (1988) の定義に準拠した広範な調査を行い、夏目漱石『こころ』から約 150 件におよぶ文化的要素を抽出し、2 名の翻訳データを合わせた計 300 件の事例に対し、特定の語彙の比較に留まらず、これら膨大なデータに対してクロス集計を用いた統計的検証を行うことで、翻訳者の戦略的な傾向を客観的な数値として可視化することを試みる。要するに本研究は、心理学モデル (DMIS) と翻訳理論 (Molina & Albir) を掛け合わせ、「翻訳と戦術」の相関を定量的に実証するという点において、従来の翻訳研究には無い新規性を有するものである。

3. 分析方法

3.1 分析対象

3.1.1 対象テキスト

本研究は、夏目漱石の代表作『こころ』における文化的要素の翻訳戦略を検証する事を目的とするため、表 2 に示したテキストを分析対象として設定した。なお、佐藤いね子は出版当時の名義であるが、本稿では以降の文において、現在の学术界で一般的な呼称である「近藤いね子」で統一する。

表 2 分析対象

原文	夏目漱石『こころ』第一部 (1914 年、岩波書店)
英訳テキスト	佐藤いね子『Kokoro』PART I (1941 年、北星堂書店) Edwin McClellan『Kokoro』Part 1 (1957 年、Regnery Publishing)

3.1.2 対象作品および媒体の選定根拠

本研究が分析対象として書籍（小説）という媒体を選定した理由、およびその中でも特に夏目漱石の『こころ』を選定した理由は、以下の 3 点である。

1 点目は媒体としての「書籍」の優位性と創造性が挙げられる。翻訳における創造性は、媒体特有の制約に大きく左右される。例えば、映像作品の字幕においては、Díaz Cintas & Remael (2007) が指摘するように標準的な視聴者が 2 行（計 70～74 文字程度）の情報を読んで理解するのに 6 秒を要するという伝統的な「6 秒ルール」などの時間的制約に加え、画面幅という物理的な空間の制約が課される。さらに、映像作品では、映像や音声（効果音等）が視覚的・聴覚的な情報として文化的意味を補完するため、言語のみによる文化説明の必要性が相対的に減退するという特徴がある。これに対し、書籍という媒体は、文字情報のみで読者に作品世界を構築させる必要がある。物理的な文字数制限が比較的緩やかであるため、翻訳者の解釈や意図が最も純粋に、かつ言語的に反映されやすい。したがって、翻訳者の「ことば」による戦略的な意思決定を分析するには、書籍が最も適した媒体であると判断した。

2 点目に作品ジャンルにおける「近代文学」の適正が挙げられる。作品ジャンルの選定において、実在の人物を扱う伝記や日記、あるいは現代の現実に即した作品（例：『窓ぎわのトットちゃん』等）は、事実の正確な伝達が優先される結果、「直訳＋注釈」という形式的な処理に留まる傾向が強いと考えられる。一方、夏目漱石の『こころ』に代表される近代文学は、フィクションとしての解釈の余地を有しながらも、明治期特有の複雑な文化的背景（衣食住、社会制度、儒教的価値観等）を色濃く反映している。このような作品は、単なる単語の置き換えを超えた、翻訳者の深い読解に基づく「創造的翻訳」が誘発されやすい。現実の事象と創作的表現が交差する近代文学は、異文化受容の段階（DMIS）と翻訳技法の相

関を検証する上で、極めて密度の高いデータを提供し得る。

3 点目に『こころ』における文化的要素の密度が挙げられる。『こころ』には、明治末期という過渡期の日本に特有の物質文化（浴衣、炬燵等）や精神文化（天罰、お気の毒等）が豊富に含まれている。これらの要素は、ターゲット文化（英語圏）との間に大きな文化差を有しており、翻訳者が「読者にどの程度の文化差を体験させるか」という戦略（DMIS）を決定する際、顕著な差異を生じさせる要因となる。また、第一部「先生と私」に限定しても約 150 件の文化的要素を抽出でき、2 名の翻訳者を合わせることで約 300 件の分析サンプルを確保できる点も、統計的妥当性を担保する上で重要な選定理由となった。

3.1.3 翻訳テキストの選定根拠

本研究において、近藤いね子（以下、近藤）訳および Edwin McClellan（以下、McClellan）訳を比較対象として選定した理由は、翻訳者の経歴、実績、および翻訳アプローチの特性という観点から、以下の 3 点に集約される。

第一に、McClellan 訳の英語圏における圧倒的な学術的権威と普及度である。McClellan は英国人の父と日本人の母を持ち、神戸で生まれ育ったバイリンガルである。16 歳まで日本で過ごした後、英国および米国のアカデミズムで活躍した彼は、日本文学を世界文学の文脈で位置づける上で決定的な役割を果たした。Ericson (2001) は、明治期の文化・精神史を講じる上で McClellan 訳が単なる歴史記述の補足資料に留まらず、カリキュラムの中で「中心的な役割」を果たしていると特筆している。歴史学者である彼が、学生たちに明治後期の日本文化を理解させるテキストとして、McClellan 訳を採用している。このように、McClellan 訳は英語圏の読者が日本近代文学に触れる際の定訳として機能しており、英語における文学的な受容を分析する上で不可欠なテキストである。

第二に、近藤訳の日本国内における先駆的な学術的価値である。近藤は津田塾大学教授を務め、1952 年には東京文理科大学（現筑波大学）より日本初の女性文学博士号を取得した英文学者である。1941 年に刊行された彼女の『こころ』英訳は、翌 1942 年に岡倉賞を受賞するなど、専門家から高い評価を受けてきた。日本人学者として原文の精読に基づく近藤訳は、テキストの意味構造を深く理解した立場からなされており、その翻訳技法を分析することは、日本語の文脈をいかに英語へ置換しようとしたかという「原語重視」の翻訳プロセスを検証する上で重要な意義を持つ。

第三に、翻訳者の背景の違いがもたらす翻訳アプローチの比較妥当性である。両翻訳者は、日本語と英語という二つの言語文化に対して異なる接点を持っている。近藤は日本の英文学者として、原文の意味や文化的背景を余すところなく伝えようとする学術的誠実さに重きを置いたアプローチが期待される。一方、McClellan は日本で育った経験から原文の機微を理解しつつも、翻訳者としては英語圏の読者に向けた文学作品としての完成度や、受容のされ方を強く意識したアプローチをとっていると考えられる。このように、原文への忠実さを志向する視点と、読者への伝達効果を志向する視点という異なるベクトルを持つ二者の

翻訳を比較することで、情報の「詳細化（又は加筆）」と「簡潔化（又は削除）」という、翻訳におけるトレードオフがどのように処理されているかを検証することが可能となる。

3.1.4 分析範囲の設定

本研究の分析対象を『こころ』の第一部「先生と私（Sensei and I）」とする。限定した理由は、以下の二点による。

一点目はデータの密度と重要性である。第一部は、作品全体の導入部として機能し、明治末期における学生文化（書生、下宿生活）、人間関係の複雑性（先生と私、奥さんの三角関係）、および舞台となる地理的・社会的背景（鎌倉、雑司ヶ谷における生活空間）といった文化的背景が最も色濃く描写されている箇所である。翻訳者がいかなる翻訳戦略を用いて、読者を作品世界へ導入しようとしているかを分析する上において、第一部に含まれるサンプルは最も重要かつ典型的なものであると判断した。

二点目は統計的妥当性の確保である。分析範囲を第一部に限定することで、約 150 の文化的要素が抽出され、二名の翻訳者による訳文を合わせた場合、総計 300 件の分析データが得られた。この母数は、翻訳者の個別的な傾向（翻訳技法と DMIS の相関関係）を定量的に検証し、統計的有意性を判断するために十分な規模を持つものである。また、分析対象の限定により、詳細な質的分析と統計的処理の両立が可能となり、本研究における方法論的な厳密性を確保することができた。

3.2 分析データの構成

3.2.1 文化的要素の抽出基準

本研究では、Newmark (1988) の定義を理論的基盤としつつ、研究対象である『こころ』に見られる明治期日本固有の文脈や、日本語特有の身体感覚を適切に分析するため、独自の抽出基準を策定した。具体的には、Newmark (1988) の分類を「具体的事物」と「抽象的・言語的表現」の二つの側面に整理・統合し、それぞれ「文化的実体」と「文化的言語表現」として定義した。

第一に「文化的実体」とは、ターゲット文化には存在しない、あるいは異なる形態で存在する具体的・物理的な要素であり、Newmark (1988) の「生態」「物質文化」「社会文化」に相当する。本カテゴリはさらに四つに細分化される。「物質文化」は、衣食住や道具など明治期の生活様式を象徴する有形の事物であり、「社会・制度・役割」は、Newmark の「社会文化」および「組織」に関連し、特定の身分や宗教的概念を含む。また、「固有名詞・地名」は単なる名称に留まらず歴史的背景を内包するものとし、「自然・季節」は単なる生物学的分類ではなく、日本の情緒的価値と結びついているものを対象とした。

第二に「文化的言語表現」とは、日本語あるいは明治期特有の概念的・身体的表現であり、Newmark (1988) の「概念」や「身振りと習慣」を言語表現の次元で捉えたものである。ここには、一般的な感情語とは区別して日本特有の倫理観（「天罰」等）を扱う「日本的・儒

教的価値観」や、日本独特の身体感覚（座り方等）やレトリックを含む「身体感覚・比喻・慣用句」が該当する。以上の基準および具体例を整理したものを表 3 に示す。

表 3 本研究で抽出する要素の属性

大項目	小項目	定義・抽出基準	『こころ』における抽出例
文化的実体	物質文化	明治期や日本独自の生活様式を象徴する衣食住、道具、通貨等の有形の事物。	萱葺、銭湯、浴衣、炬燵、五銭
	社会・制度・役割	特定の身分、職業、慣習、行事、宗教的概念。	書生、下女、仏、塔婆、お墓参り、縁日
	固有名詞・地名	単なる名称に留まらず、歴史的背景や文化的意味を内包するもの。	鎌倉、雑司ヶ谷、箱根、丸善
	自然・季節	日本の四季観や情緒的価値と結びついてある生物や季節表現。	秋、銀杏、熊笹、躑躅
文化的言語表現	日本的・儒教的価値観	日本特有の精神文化や倫理観を表す語彙。一般的な感情語は除外する。	天罰、心丈夫、敬意、謙遜、お気の毒
	身体感覚・比喻・慣用句	日本独特の身体感覚や、独自のレトリック。	煙草を飲む、胡坐、空坊主、幽邃

3.2.2 分析データの量的規模

前節で定めた基準に基づき、『こころ』第一部から文化的要素の抽出を行った結果、抽出された要素数は 152 件となった。本研究では、これらの要素を近藤訳および McClellan 訳の二種類の英訳と比較照合するため、分析対象となるデータの総数は 304 件（152 項目×2 名）である。

この規模のデータセットを構築したことにより、本研究は主に三つの分析的利点を得て

いる。第一に、サンプル数が十分に確保されたことで、翻訳者ごとの傾向の差異を単なる印象論ではなく、統計的な裏付けのあるデータとして抽出し、一般化可能な知見を導き出すことが可能となった。第二に、全体的な傾向を把握する定量的検証と並行して、個別の翻訳事例に見られる文脈的な工夫や機微を掘り下げる質的分析の双方を、偏りなく実施することができる。第三に、特定の翻訳技法と DMIS の各段階との間にどのような相関関係があるのかを、高い信頼度をもって測定するための基盤が形成されている点である。

3.3 分析的枠組みの定義

3.3.1 Molina & Albir (2002) の翻訳技法分類の再定義

本研究では、Molina & Albir (2002) が提唱する 18 の翻訳技法を分析の基盤とする。ただし、分析対象である『こころ』が近代文学作品であり、書き言葉であること、および本研究の目的が文化的要素の処理における戦略的意図の抽出にあることを鑑み、元の分類をそのまま適用するのではなく、本研究に適用可能な 10 種類の技法を選定し、残りの 8 種類を分析対象外とした。本研究で採用する技法の定義と『こころ』における具体例を表 4 に示す。なお、Calque と Particularization は『こころ』第一部に存在しなかったため、定義から導かれる事例を記述した。

表 4 本研究で採用する翻訳技法（10 分類）

翻訳技法	説明	本研究で見られた事例
Borrowing	日本語の語句をそのまま音写（ローマ字化）して使用する技法である。訳文中や脚注において補足説明はなされない。	銭（単位）-> sen
Amplification	Borrowing（日本語を音訳）に加え、原文には無い詳細な情報やパラフレーズを付加する技法である。訳文中・脚注で情報量を意図的に増やす処置を指す。	袴 -> hakama + 脚注で A kind of kilt worn by students. と説明。
Calque	原文の語句を構造的に訳して取り入れる技法である。文化的要素を逐次的に訳していて、英語において不自然な文構造や言語構造になった場合のみ Calque とする。	切腹 -> cut-belly
Literal translation	原文の語句を構造的に訳して取り入れる技法である。文化的要素を逐次的に訳していて、英語において自然な文構造や言語構造になった場合のみ Literal translation とする。	都会人 -> town people
Established equivalent	辞書や慣用表現として、認められている定型的な等価表現を使用する技法である。英和辞書に載っている外来語以外の表現は全て Established equivalent とする。	お気の毒 -> sorry for you ※ 和英辞書に対訳と記述あり。
Generalization	原文の具体的・特殊な用語を、より一般的・中立的な上位概念の用語に置き換える技法である。	着物 -> clothes
Particularization	原文の一般的な用語を、より具体的・精密な下位概念の用語に置き換える技法である。	花 -> cherry blossom
Description	原文の用語や表現をその形態や機能の解説に置き換える技法である。	炬燵 -> the warm sunken fireplace with its wadded covering
Adaptation	原文の語句を、目標文化において機能的に類似した別の文化的要素に置き換える技法である。	将棋 -> chess
Reduction	原文に含まれる情報項目を意図的に削除する技法である。	香車 -> 無し

第一に、原語の形式や構造を強く保持する技法として、Borrowing、Amplification、Calque が挙げられる。Borrowing は、明治期の日本の通貨単位である「錢」を“sen”のようにローマ字で音写し、補足説明を加えない手法である。これに対し、音写した語句に脚注や文中での補足説明を加え、読者の理解を意図的に助ける処置を行った場合、本研究ではこれを Amplification と定義する。また、Calque は「切腹」を“cut-belly”と訳すように、原文の構成要素を逐語的に訳出して原語の構造を目標言語に持ち込む技法を指す。本研究では、後述する Literal translation と明確に区別するため、Molina & Albir (2002) の定義を細分化し、原語の構造を維持した結果として、目標言語において文法的に不自然、あるいは慣用的に逸脱した表現となる場合を Calque に分類する。なお、Molina & Albir (2002) の定義には、語彙的な Calque (構成要素ごとに訳し、自然な形となるよう調整) と構造的な Calque (原文の統語構造を保持したまま変換) が含まれるが、文法的に不自然である構造的な Calque と文法的に自然である語彙的な Calque では、読者にとっての受け取り方が異なると考えられるため、本研究では構造的な Calque のみを Calque として扱う。語彙的な Calque については Literal translation に含めることとする。理由は、語彙的な Calque は目標言語の文法規範を逸脱しないため、読者の受容や認知的な負荷という機能的側面において、Literal translation と実質的な差異がないと判断されるためである。

第二に、目標言語の慣習に準拠する技法として Established equivalent と Literal translation を採用する。Established equivalent は辞書や慣用表現として、既に定型的な等価表現に変換する技法である。分析の再現性を担保するため、Literal translation や Generalization 等に分類される訳でも「和英辞書に対訳として載っている」、かつ、「外来語由来でない」場合は Established equivalent に分類する。本研究では、参照する辞書として『Weblio 英和・和英辞典』¹を採用した。『Weblio 英和・和英辞典』は『新英和中辞典』『新和英中辞典』(研究社)を中心に 85 種類の英和辞典・和英辞典、257 万語の英語と 246 万語の日本語、合計 503 万語を収録するオンライン辞書である (GRAS グループ)。複数の辞書を統合し、広範な語彙をカバーする『Weblio 英和・和英辞典』を採用することで、より客観的な分析を目指した。また、Literal translation は、原文の構成要素を逐語的に訳出して、訳文の構造が目標言語の文法構造に適合し、自然な表現になる場合に当たる。

第三に、原文の意味範囲を操作、あるいは説明的に処理する技法群として Generalization、Particularization、Description がある。Generalization を「着物」を“clothes”と訳すように、具体的・特殊な用語をより一般的な上位概念へ抽象化する技法である。逆に、Particularization は文脈に応じてより具体的な下位概念へ限定する技法である。また、一対一の対応語を用いず、「炬燵」を“the warm sunken fireplace with its wadded covering”のように sunken fireplace (沈んだ暖炉) と wadded covering (綿の入った掛物) というような用語を使用し、原文の対応語を使わずに記述的に説明する技法を指す。

最後に文化的な変換や削除を伴う技法として Adaptation と Reduction が挙げられる。

¹ 『Weblio 英和・和英辞典』 (<https://ejje.weblio.jp/>)

Adaptation は「将棋」を“chess”に置き換えるように、目標文化に存在する機能的に類似した要素へ変換する技法であり、原文の文化的固有性は失われる代わりに読者の親和性は高まる。一方、Reduction は原文に含まれる文化的情報の全部を意図的に省略する技法である。Molina & Albir (2002)は情報の抑制を Reduction と定義しているが、分析の明確化のため、対象語彙が訳出されず完全に削除された場合のみをこの分類に含める。

Molina & Albir (2002) の 18 分類のうち、以下の 8 つの技法については、その定義と本研究の分析対象である小説の性質を照らし合わせた結果、対象外とした。

第一に、通訳や視聴覚翻訳など、小説翻訳以外のメディア固有の技法であるため除外したものである。Linguistic amplification は発話時間を埋めるために言語要素を追加する技法であり、Linguistic compression は逆に字幕の文字数制限などのために言語要素を要約・合成する技法である。これらは書記テキストには該当しない。また、Substitution は言語要素とパラ言語要素（ジェスチャー等）を相互に置き換える技法であり、これも主として通訳で用いられるため分析対象から外した。

第二に、他の技法との重複や、分析の客観性確保の観点から再分類したものである。Transposition は、意味を変えずに品詞等の文法カテゴリを変更する技法である。しかし、言語構造上の自然な変更であれば Established equivalent や Literal translation に含まれ、説明が加わる場合は Amplification の方が分類として適しているため、独立した技法としては採用しない。Discursive creation は、映画の邦題のように、文脈外で予測不可能な一時的等価関係を構築する技法である。本研究では、著しい乖離が見られる場合は Adaptation として扱う方が、一貫性を保てると判断した。Modulation は、視点や認知カテゴリの変更（具体⇄抽象、否定⇄肯定等）を行う技法である。しかし、これは非常に広範な技法であり、思考や視点の切り替えを伴う技法（Generalization、Particularization、Adaptation 等）の基盤にある上位概念として機能している側面がある。そのため本研究では、Modulation という包括的なカテゴリは廃し、訳出結果の具体的特徴（語彙が包括的になれば Generalization、具体的になれば Particularization、文化的要素が置き換われば Adaptation 等）に基づいて分類することとした。

第三に、本研究の分析目的と合致しないものである。Variation は方言やトーンなどの言語的・パラ言語的要素を変更する技法であるが、本分析箇所会話文においてこれらは主要な分析要素とならない。Compensation は、原文のある箇所で失われた意味や効果を訳文の別の箇所ですらう技法である。本研究は個々の文化的語彙の対応関係を厳密に分析することを目的としているため、文脈を跨ぐ補償の判定は客観性を損なう恐れがあるとして除外した。

3.3.2 Bennett (1986; 1993) の DMIS の再定義

本研究では、Bennett (1986; 1993) が提唱した DMIS を、翻訳者が「読者にいかなる文化受容体験を意図的に促すか」という翻訳戦略の指標として援用する。本来の DMIS は、個人の異文化に対する心理的成長を測定するものであるが、本研究においては、これを文化的要素に対応する翻訳テキストの記述的特徴に基づき、以下の表 5 に示す 4 つの段階に再定義し

て分析に適用する。なお、ここで示す「想定される読者の状態」は DMIS 段階を読者の経験として再解釈したものである。

表 5 本研究で採用する DMIS と翻訳テキスト・想定される読者の状態

DMIS	翻訳テキストの記述的特徴	読者の状態
Denial	語彙・記述が存在しない。	認知不能
Minimization	目標文化における既知の概念のみで構成されている。	同化や自文化視点での理解
Acceptance	目標言語の規範から逸脱した語彙や、異国の事物である旨の明示がある。	表層的な差異の認識
Adaptation	目標言語の規範から逸脱した語彙に加え、その意味や機能を補足する情報と共に記述されている。	文脈的理解・視点の転換

まず、Denial は、翻訳テキストにおいて文化的要素を示す語彙や記述そのものが存在しない状態を指す。翻訳過程で削除された結果として、テキスト上には異文化を示す手がかりが一切残されていない。この状態において、読者は異文化要素との接触を物理的に遮断されるため、その意識上に「文化的な違い」が発生することではなく、認知不能の状態に置かれる。

次に、Minimization は、文化的要素に対応する翻訳テキストが目標文化における「既知の概念」のみで構成されている状態を指す。ここでは、読者が異文化の固有性を意識せず、自国の文化的枠組みの中で処理してしまう状態を指す。読者は「文化的な差異は存在しない」という認知的錯覚を抱くこととなる。なお、概念が既知であるかどうかの客観的判断基準としては、英英辞典において外来語であることを示す注釈がなく、一般的な語彙として掲載されているかどうかを用いる。本研究では、この基準を適用するための参照辞典として、アメリカ英語の一般辞典として広く利用されている『Merriam-Webster Online』²を採用した。

そして、Acceptance は、目標言語の音韻や統語的な規範から「逸脱」した語彙が使用されている、あるいは異国の事物である旨が明示されている状態で、読者が「自文化とは異なる異質なもの」が存在することを認識するが、その背景や深い意味までは把握できていない段階を指す。

最後に Adaptation は読者が自文化の視点を一時的に離れ、その要素が異文化の中で持つ機能や文脈を論理的に理解・共感できる状態を指す。テキストの状態としては、Acceptance のテキストの状態に加え、適切な注釈や文中での詳細な説明により、読者が異文化の視点を取り入れて深く理解できる状態である場合に Adaptation と分類する事とする。

一方、DMIS に含まれる Defense および Integration については、以下の理由から本研究の

² 『Merriam-Webster Online』 (<https://www.merriam-webster.com/>)

分析対象より除外した。

まず、Defense の除外理由についてだが、この段階は、自文化の優位性を強調するために異文化を意図的に歪曲したり、差別的な語彙に置き換えたりする段階である。『こころ』のような一般的な学術的・商業的翻訳出版物を前提とする限り、こうした悪意的な変換が行われる事例は極めて少なく、分析上の有効性が低いと判断したためである。

また、Integration の除外理由については、この段階は、複数の文化的アイデンティティを自己の中で融合させる高度な心理状態を指す。Bennett (1993) は、Integration はアイデンティティの発達に強く関わる段階と述べている。つまり、テキスト上の語彙選択のみから客観的に測定することが不可能であり、また Adaptation 段階との境界線が曖昧になることを避けるため、本研究の枠組みからは除外することとした。

3.4 分析手順

本研究では、翻訳者の「戦略 (DMIS 段階の設定)」と「戦術 (翻訳技法の選択)」の相関関係を明らかにするため、以下の 4 つのステップからなる分析プロセスを構築した。このプロセスは、定性的なテキスト分析と定量的な統計処理を組み合わせることで、翻訳者の意思決定過程のモデル化を試みるものである。

3.4.1 文化的要素の抽出とコーパスの構築

まず、夏目漱石の『こころ』第一部「先生と私」の原文テキストを精読し、3.2.1 項で定めた抽出基準に基づき、文化的要素を含む語句と文を抽出した。次に、抽出した各要素に対応する近藤訳および McClellan 訳の英訳箇所を特定し、原文・訳文・文化的要素を相互に対応付けた分析用コーパス (CSV 形式)³ の作成を行った。

3.4.2 翻訳技法の判定

コーパス化された合計 304 件の事例 (152 要素 × 2 名) に対し、3.3.1 項で選定した 10 種類の翻訳技法を割り当てた。判定のプロセスにおいては、分類の恣意性を排除し、データの再現性を高めるために以下の手順を踏んだ。第一に、生成 AI (gemini-2.5-flash⁴) を用いた予備的分析を行った。各事例に対して推奨される技法とその選定理由、および根拠となるテキスト箇所を出力させ、判定の補助資料とした。第二に、客観的な基準を要する Established equivalent の判定において、3.3.1 項で定めた通り『Weblio 英和・和英辞典』を参照した。該当語句が対訳として掲載されているものは、データに URL と閲覧日を対応付け記録した。第三に、筆者による全件精査を行った。AI の出力結果および辞書データを参照しつつ、文脈に照らして定義への適合性を最終確認した。なお、AI の判定と筆者の判断が乖離した場

³ 分析用コーパスは以下で公開: <https://github.com/zawa-kun/senior-thesis-tools/tree/main/data/processed/alignment>

⁴ Gemini-2.5-flash (Google) を使用。分析は 2025 年 12 月に実践。使用したプロンプト及びプログラムは以下で公開: https://github.com/zawa-kun/senior-thesis-tools/tree/main/tools/analyze_translation

合は、3.3.1 項の定義に立ち返り、筆者の判断を優先してデータを修正・確定させた。⁵

3.4.3 DMIS（読者の異文化理解段階）の判定

3.4.1 項で構築したコーパスの各事例に対し、3.3.2 項で定義した 4 つの DMIS 段階を判定した。このプロセスにおいても、判定の効率化と多角的な視点の確保を目的として、生成 AI（gemini-2.5-flash⁶）による予備的分析を行った。

まず、Denial については、訳文において文化的要素の情報が完全に欠落（削除）している事例をこれに分類した。次に、境界の判断が難しい Minimization と Acceptance については、読者が感じる異質性の有無を客観化するため、辞書の掲載有無を判断基準とした。具体的には『Merriam-Webster Online』を参照し、訳語が「外来語 (Foreign Word)」としての注釈なしに一般語として掲載されている場合は、英語圏における既知の概念とみなして Minimization に分類した。対して、辞書に掲載されていない日本語の音写（ローマ字表記）や、英語として不自然な記述（直訳等）に留まる場合は、表層的な差異が残存していると判断し Acceptance とした。最後に、訳文中での説明的加筆や脚注によって文化的背景が補足されている事例については、文脈的な理解が可能であるとして Adaptation と判定した。

以上の基準に基づき、AI の出力結果と辞書の照合結果を筆者が全件精査し、最終的な DMIS 段階を確定させた。⁷

3.4.4 クロス集計と相関関係の検証

前項までに確定した「翻訳技法」と「DMIS」のデータセットを用い、両者の相関関係を明らかにするための統計処理を行った。

第一の手順として、翻訳者（近藤・McClellan）ごとのデータセットに対し、 χ^2 乗検定を実施した。これは、翻訳者の違いによって翻訳技法と DMIS の関係性に統計的な有意差（異質性）があるかを確認するためである。検定の結果、両者の傾向に有意な差が認められない（データが等質である）と判断された場合には、サンプルサイズを確保し分析の精度を高めるため、両者のデータを合算して全体のクロス集計を行うこととした。

第二の手順として、作成されたクロス集計表に対し、調整済み標準化残差を用いた残差分析を行った。クロス集計表におけるパーセンテージの偏りが、単なる偶然によるものか、あるいは統計的に意味のある相関によるものかを判別するためである。本研究では、調整済み標準化残差の絶対値が 1.96 を超える場合を、有意水準 5% ($p < .05$) で統計的に有意な偏り

⁵ 翻訳技法分類済みデータは以下で公開:<https://github.com/zawa-kun/senior-thesis-tools/tree/main/data/processed/translation>

⁶ Gemini-2.5-flash(Google)を使用。分析は 2025 年 12 月に実践。使用したプロンプト及びプログラムは以下で公開:https://github.com/zawa-kun/senior-thesis-tools/tree/main/tools/analyze_dmis

⁷ DMIS 分類済みデータは以下で公開:<https://github.com/zawa-kun/senior-thesis-tools/tree/main/data/processed/dmis>

（正の相関または負の相関）が存在すると判定する基準を採用した。

これらの統計処理を通じて、特定の翻訳技法が選択された際に、特定の DMIS 段階がいか
なる確率と確度をもって導かれるかをモデル化する。

4. 結果

4.1 全体的な傾向

4.1.1 翻訳技法の割合

近藤と McClellan の両訳者における翻訳技法の出現回数および割合を比較した結果を表
6 および図 1 に示す。

表 6 翻訳技法の出現回数および割合の比較

翻訳技法	近藤	比率	McClellan	比率
Established equivalent	64	42.1%	62	40.8%
Generalization	19	12.5%	20	13.2%
Borrowing	18	11.8%	16	10.5%
Reduction	13	8.6%	19	12.5%
Description	13	8.6%	14	9.2%
Amplification	11	7.2%	7	4.6%
Literal translation	9	5.9%	9	5.9%
Adaptation	5	3.3%	5	3.3%
Particularization	0	0.0%	0	0.0%
Calque	0	0.0%	0	0.0%

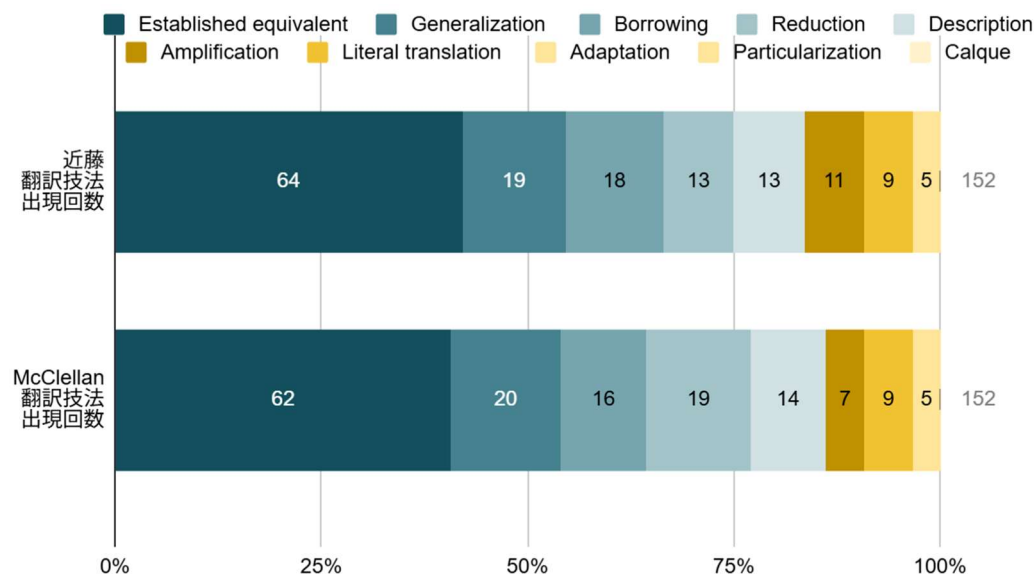


図 1 各訳者における翻訳技法の構成比（100%積み上げグラフ）

全体的な傾向として、両訳者ともに Established equivalent が約4割と最も高い割合を占め、次いで Generalization が約1割強で続いている。この上位2つの技法だけで全体の過半数を占めており、両者ともに、ターゲット読者にとって馴染みのある表現や、より一般的な概念へと置換することで、原文の文化的要素が持つ異質性を緩和していることが共通して読み取れる。また、Particularization と Calque の使用が両者共に見られなかったことも、この傾向を裏付けている。

一方で、使用順位下位の技法には訳者ごとのアプローチの違いも観察された。近藤は Amplification の割合が 7.2%（11 回）であり、McClellan の 4.6%（7 回）と比較して高い数値を示している。また、Borrowing においても近藤が McClellan を上回る結果となった。対照的に McClellan は Reduction の割合が 12.5%（19 回）と、近藤の 8.6%（13 回）よりも顕著に高い傾向が見られた。

しかしながら、Literal translation と Adaptation の出現回数が両者で完全に一致（それぞれ 9 回、5 回）している点や、技法全体の構成比の順位に大きな逆転が見られない点から、両者の翻訳技法選択は極めて類似していると言える。

4.1.2 DMIS の割合

近藤と McClellan の両訳者における各要素の翻訳箇所が、読者にどのような異文化受容段階（DMIS 段階）をもたらしているか、その出現回数および割合を比較した結果を表 7 および図 2 に示す。

表 7 DMIS の出現回数および割合の比較

DMIS	近藤	比率	McClellan	比率
Minimization	105	69.1%	106	69.7%
Acceptance	20	13.2%	22	14.5%
Denial	15	9.9%	19	12.5%
Adaptation	12	7.9%	5	3.3%

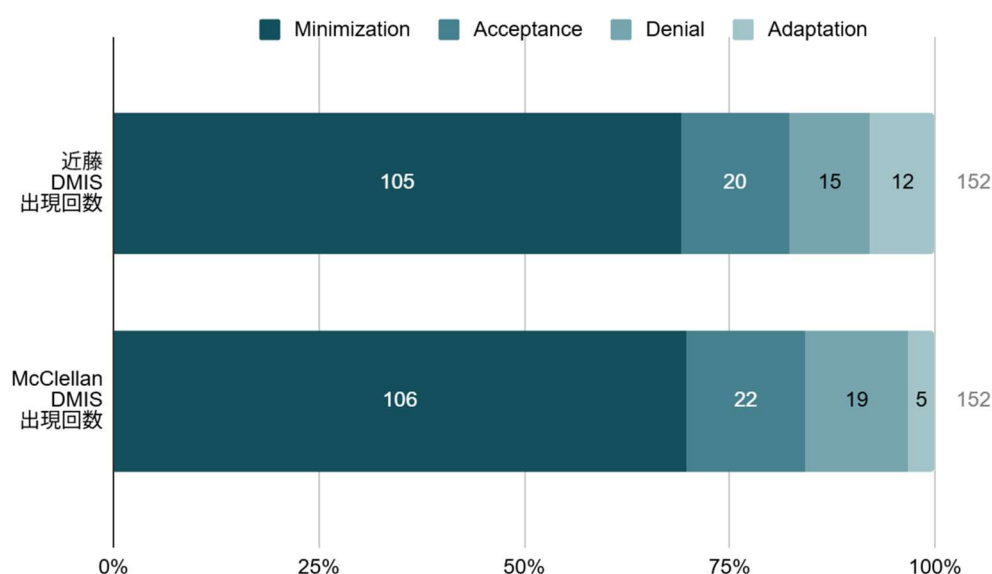


図 2 各訳者における DMIS の構成比 (100%積み上げグラフ)

全体的な傾向として、両訳ともに Minimization が約 7 割 (近藤: 69.1%、McClellan: 69.7%) と、過半数を大きく超える割合を占めている。これは、原文に含まれる日本固有の文化的要素が、英語圏の読者にとって既知の概念や普遍的な事象として提示されていることを意味する。結果として、読者が両訳とも文化的な差異による違和感を覚えることなく、自文化の枠組みの中でスムーズに物語を享受できる状態に置かれていると言える。

また、各段階の出現頻度の順位においても、両者ともに Minimization>Acceptance>Denial>Adaptation という同一の傾向を示した。2 番目に多い Acceptance は 13~14%程度であり、ここでは読者は、自文化にはない日本独自の文化要素であると、表層的な差異は認識するものの、その背景にある深い意味や文脈までは理解しない状態に留まっていることがデータから読み取れる。

一方で、両者の訳文には、差異も見られた。最も顕著な違いは、異文化理解の深化を示す Adaptation の割合である。近藤の Adaptation の割合は 7.9% (12 回) と、McClellan の 3.3% (5 回) と比較して高い数値を示している。これは、近藤訳の方が、読者が単なる差異の認知を超え、その文化的要素が持つ本来の機能や文脈を論理的に理解できる箇所が多いこと

を示している。

対照的に、McClellan は Denial の割合が 12.5% (19 回) と、近藤の 9.9% (15 回) よりもやや高い傾向にある。Denial は、文化的要素そのものが読者から不可視化されて認識できない状態を指すため、McClellan 訳では読者が異文化的な要素に接触するその機会そのものが、近藤よりも限定的になっていると言える。

以上の結果から、両訳ともに基本的には読者は Minimization の段階を基調としながらも、近藤訳は要所で Adaptation による深い文化理解を提供し、McClellan 訳は Denial によって読者の異文化接触を遮断する傾向があるという、読者の理解度の違いが確認された。一方で DMIS の構成比の順位が同じである点から、両者の翻訳戦略の大枠は類似しているとも言える。

4.2 クロス集計分析と統計的傾向

4.2.1 翻訳技法と DMIS の分布傾向 (クロス集計結果)

近藤と McClellan の 2 名の翻訳者における翻訳技法の選択傾向と、DMIS 段階との関連性を検証するため、クロス集計を行った。各翻訳者の集計結果を図 3 に示す。

図 3 各翻訳者の翻訳技法と DMIS 段階のクロス集計表 (翻訳技法ごとのヒートマップ)
(左 : 近藤、右 : McClellan)

		DMIS				DMIS			
		Minimization	Denial	Adaptation	Acceptance	Minimization	Denial	Adaptation	Acceptance
翻 訳 技 法	Reduction	0	13	0	0	0	19	0	0
	Literal translation	8	0	0	1	7	0	0	2
	Generalization	18	1	0	0	20	0	0	0
	Established equivalent	63	0	0	1	61	0	0	1
	Description	12	0	1	0	12	0	0	2
	Borrowing	0	0	0	18	0	0	0	16
	Amplification	0	0	11	0	1	0	5	1
	Adaptation	4	1	0	0	5	0	0	0

2名の翻訳者の翻訳技法×DMIS 段階の分布の差を検討するため、均質性について χ^2 二乗検定を行った。その結果、翻訳者間で有意な差は検出されなかった ($\chi^2(15)=11.14, p=0.74$)。よって、翻訳者差の統計的証拠は得られなかったため、これら2つのデータを合算して全体的な分析を行った。翻訳技法ごとの DMIS 段階への分類比率を示したヒートマップ (図 4) に基づき、各技法がどのような文化的体験をもたらしているかを確認する。

図 4 翻訳技法と DMIS 段階のクロス集計

		DMIS			
		Minimization	Denial	Adaptation	Acceptance
翻訳技法	Reduction	0	32	0	0
	Literal translation	15	0	0	3
	Generalization	38	1	0	0
	Established equivalent	124	0	0	2
	Description	24	0	1	2
	Borrowing	0	0	0	34
	Amplification	1	0	16	1
	Adaptation	9	1	0	0

全体的な傾向として、まず特定の技法と DMIS 段階の間に極めて強い結びつきが確認された。具体的には、Reduction は 100%の確率で Denial に分類されている。情報を削除するという行為は、読者から文化認知の機会を完全に奪う結果に直結していると言える。同様に、Borrowing もその大半が Acceptance に分類された。音写によって異文化の存在自体は提示されるものの、そこに適切な補足情報が伴わない場合、読者の認識は差異の確認のみに留まる傾向にある。

次に、Minimization への集中が挙げられる。Established Equivalent、Generalization、Description、Literal translation といった技法の多くは、Minimization に分類された。これらの技法は、異文化要素を自文化の枠組みや既知の概念へと置き換える働きをしており、読者の認知的負荷を低減させる効果を持つと考えられる。ただし、Literal translation の約 17%や Description の一部などは、Minimization ではなく Acceptance 等に分類されるケースも見られた。このことは、これらの技法を用いたからといって必ずしも同化に至るわけではなく、文脈によっては異質感が残り続ける「揺らぎ」が存在することを示唆している。

一方で、Adaptation へと至る経路は限定的である。全データの中で Adaptation へ到達した事例は少数であったが、その多くにおいて Amplification (増幅) が用いられていた点は注目に値する。Amplification を用いた場合の Adaptation 到達率は、他の技法と比較して顕著に高

い結果となった。

4.2.2 翻訳技法×DMIS の統計的有意性（調整済み標準化残差分析）

前項で確認されたパーセンテージによる傾向が、単なる偶然の偏りではなく統計的に有意であるかを検証するため、調整済み標準化残差を算出した。その結果をヒートマップ（図 5）に示す。なお、調整済み標準化残差の絶対値が 1.96 を超える場合、有意水準 5%で統計的に有意とみなされ、その組み合わせの出現が偶然ではなく有意に多い、または少ないことを示す。

図 5 翻訳技法と DMIS の調整済み標準化残差ヒートマップ

		DMIS			
		Minimization	Denial	Adaptation	Acceptance
翻訳技法	Reduction	-9.01	16.85	-1.46	-2.39
	Literal translation	1.32	-1.55	-1.06	0.36
	Generalization	4.07	-1.83	-1.63	-2.68
	Established equivalent	9.23	-5.21	-3.57	-5.20
	Description	2.30	-1.93	-0.45	-1.01
	Borrowing	-9.32	-2.20	-1.51	15.45
	Amplification	-6.06	-1.55	15.86	-1.05
	Adaptation	1.44	-0.12	-0.78	-1.29

第一に、調整済み標準化残差が 1.96 以上となり、特定の DMIS 段階との間に統計的に有意な関連が認められたものが複数見られた。具体的には、Reduction と Denial の間には 16.85 という残差が算出された。Reduction は情報の削除と定義されるため、この結果は分析フレームワークの論理的整合性が保たれていることを追認するものであるが、同時に、情報を物理的に遮断する行為が読者の認知機会を確実に奪う（Denial）という事実を、定量的にも裏付けている。また、Amplification と Adaptation の間にも 15.86 という高い数値が確認された。定義上、Adaptation は文脈的な補足を要するため Amplification との親和性は自明であるとも言える。しかし重要なのは、Amplification が Adaptation への到達を統計的に保証する唯一の技法として抽出された点にある。これは、他の技法では読者をこの理解段階へ導くことが困難であることを逆説的に証明しており、Amplification が同段階に至るための必要条件である可能性を強く示唆している。さらに、Borrowing と Acceptance の間にも 15.45 という強い結びつきが確認された。Borrowing は異質性を提示する機能には優れているものの、単独では深い理解である Adaptation へ読者を導くには至らない傾向があることが示唆される。また、

Minimization 段階との間に、Established Equivalent (9.23)、Generalization (4.07)、Description (2.30) が算出され、有意な正の相関が認められた。これらはすべて統計的に有意に Minimization と結びついている。ただし、残差の大きさを見ると Established Equivalent (9.23) が突出しており、Generalization や Description はそれに比べて結合度が低い。このことから、辞書的な等価語への置き換え (Established Equivalent) は、異質感を消去し、読者を Minimization へと誘導する最も確実な技法であることが示された。

第二に、調整済み標準化残差が 1.96 を下回り、統計的有意性が認められないものも見られた。Literal translation (1.32) や Adaptation (1.44) といった技法は、パーセンテージ上では Minimization に分類される割合が高いものの、統計的には「有意な相関」までは認められなかった。これらの技法における残差の低さは、結果のバラつきを示している。すなわち、これらの技法は特定の DMIS 段階を自動的に決定するものではなく、翻訳の文脈や実行の質によって、Minimization にも Acceptance にも転じうる可変的な性質を持つことがデータから示唆される。

なお、本分析において Literal translation (直訳) は特定の DMIS 段階との有意な相関を示さなかった。これは、直訳された全 18 事例のうち 15 事例が Minimization に分類される一方で、「一切衆生悉有仏生」が「All living things possess the quality of Buddha」と訳されている例のように、言語的に正確な置換がなされていても、その語彙が持つ宗教的・文化的背景の特殊性から Acceptance へと分類が分散した事例がわずかに含まれていたためである。このように、Literal translation は技法そのものが特定の受容段階を決定づける力が弱く、対象となる語彙の性質によって結果が変動する中立的な性質を持つことが、統計上の有意差の欠如に繋がったと考えられる。

5. 考察

5.1 戦略 (DMIS) と戦術 (技法) の翻訳フレームワーク

4 章で行った定量分析の結果、特定の翻訳技法と、それが読者にもたらす異文化受容段階 (DMIS) との間には、統計的に有意な相関が存在する事が明らかとなった。本節では、この分析結果を基盤として、翻訳者が意図する戦略 (DMIS) から最適な戦術 (翻訳技法) を導き出すための意思決定フレームワークを提唱する。

まず、統計分析によって確認された、各 DMIS 段階への誘導効果が高い翻訳技法をまとめたものを表 8 に示す。

表 8 読者に体験させたい理解の深さ（DMIS 段階）と翻訳技法の対応表

DMIS	翻訳技法
Denial	Reduction
Minimization	Established equivalent Description Generalization (Adaptation) (Literal translation)
Adaptation	Amplification
Acceptance	Borrowing (Literal translation)

表 8 に示した統計的相関に基づき、本研究では翻訳者のための意思決定プロセスを構築した。このモデルは、翻訳における戦略、すなわち読者に提供したい文化的体験（DMIS）を設定することで、その戦略に統計的に裏付けられた適切な翻訳技法を選択できるよう設計されている。

まず、翻訳者が最初に行うべき判断は、対象となる文化的要素を翻訳先のテキストにおいて明示的に存在させるか否かである。文化的要素を直接的には物語に関係ないものであると判断し、物語の進行を優先する場合、その戦略は Denial に相当する。この場合、分析結果が示す通り、情報を完全に削ぎ落とす Reduction が統計的に裏付けられた唯一かつ確実な翻訳技法となる。一方で、その要素を何らかの形でテキスト内に留め、読者に提示した方が良いと判断した場合には、次の判断へと進むことになる。

次に、残すと決めた要素を通じて、読者に異質感や違和感をどの程度抱かせたいかを検討する。ここで、異文化要素をターゲット文化における既知の概念や枠組みへと読み替え、読者に翻訳であることを意識させずに物語への没入を促したい場合、戦略は Minimization となる。この段階を読者に体験させるには、統計的に最も安定した相関を示した Established equivalent が最も推奨する翻訳技法となるが、文脈に応じて Description や Generalization を併用することも極めて有効である。これらの技法は、読者の認知的負荷を最小限に抑えつつ、自文化の知識体系内でのスムーズな理解を可能にする。

対照的に、読者に自文化とは異なる存在である事を明示し、異文化との接触体験を提供し、その異質性の提示によって読者にどのような理解を要求するかを決定する。単に異国情緒を演出し、異文化の存在を示す程度に留め、詳細な意味内容や背景の理解までは問わないのであれば、戦略は Acceptance に分類される。この際、推奨される翻訳技法は Borrowing である。音写された語彙は視覚的・聴覚的に強力な異化効果を発揮するが、補足情報が伴わない限り、読者の理解は表層的な差異の認知に留まることとなる。

しかし、読者に自文化中心的な視点を一時的に離れさせ、その要素が本来の文化圏で持つ

機能や文脈を論理的に共感・理解させたい場合、戦略は **Adaptation** となる。この段階を体験させるには、データの偏りが示す通り、**Amplification** が不可欠な翻訳技法となる。**Borrowing** や **Literal translation** だけでは読者の理解が表層 (**Acceptance**) に留まる確率が高いことがデータから判明しており、加筆や注釈という記述上のコストを敢えて払い、読者に積極的な学習を促すことによって初めて、統計的にも有意な確率で深い適応段階への誘導が可能となるのである。

なお、本フレームワークの構築において留意すべき点として、**Literal translation** が **Minimization** と **Acceptance** の二箇所に配置されていることが挙げられる。これは、第4章の定量分析において直訳が特定の段階へ有意に偏る結果を示さなかった事実を反映したものである。すなわち、直訳という技法は文脈の適合性や読者の既有知識量といった外部要因によってその効果が左右される可変的な性質を内包していると言える。したがって、翻訳者が特定の **DMIS** 段階への誘導を確実に制御しようとする戦略的な状況においては、この不確実性を伴う直訳を避け、目的に応じて **Established equivalent** や **Borrowing** といった、結果の予測可能性が統計的に保証された技法を優先的に選択すべきであることが本モデルの示唆するところである。

5.2 Minimization の多さから読み取れる文学翻訳の性質

第4章の全体分析において、近藤・McClellan の両訳ともに、読者の体験する **DMIS** 段階の約7割が **Minimization** によって占められていることが明らかになった。この圧倒的な比率は、翻訳者の個別の翻訳技法の集積というよりも、文学作品、とりわけ『こころ』のような近代小説の翻訳において何が優先されるべきかという、ジャンル固有の性質を強く反映したものである。

小説を読むという行為の主たる目的は、物語の筋を追い、登場人物や情景に没入することである。すなわち、そこには異文化の理解よりも、物語世界へのスムーズな没入が求められる。Ryan (1991, pp. 48-60) は、読者がフィクションの虚構世界を解釈する際に、テキストによって明示的に否定されていない限り、虚構世界を現実世界と同じ法則・論理で自動的に構築する、という「最小離脱の原則 (principle of minimal departure)」を提案している。たとえば、「太郎はカフェでコーヒーを注文した」というテキストに対して、読者は無意識に「コーヒーは液体である」「太郎は人間である」「お金を払う必要がある」といった現実知識を投影する。つまり、もし翻訳された小説において、見慣れない異文化の語彙や詳細な注釈が頻出した場合、読者は、本来であれば無意識に現実世界の知識で補完していた要素を、意識的にテキストから構築し直し、学習的な処理にリソースを割くことを余儀なくされる。これは小説としての美的体験を損なうノイズになり得る。

したがって、翻訳全体の基調として **Minimization** が選択されることは、読者の認知的負荷を低減させるための必然的な戦略であると言える。翻訳者は、ターゲット文化における既知の概念へと置き換えることで、読者が文化的差異に躓くことなく、自文化の枠組みの中で物

語を享受できる環境を整えているのである。

Venuti (1995) は、目標文化における流暢さを優先する事で翻訳者の存在を不可視化し、異文化の異質性をターゲット文化の価値へと同化させる翻訳規範を「受容化 (Domestication)」と定義したが、本研究の結果は、近代小説の日英翻訳においても、この「受容化」が支配的な規範として機能していることを定量的に裏付けるものである。Minimization の多さは、翻訳による文化の喪失というよりも、作品の「文学的価値」と「没入感」を保護するための高度な戦略的判断の結果であると解釈すべきである。ただし、この戦略には後述するような文化的固有性の透明化というトレードオフが存在する。

5.3 Established Equivalent の機能と「等価の幻想」

前節で論じた Minimization の必然性は、一方で以下のような問題も内包している。第4章の分析結果において、近藤・McClellan の両訳者ともに最も多用していた翻訳技法は Established equivalent であり、その割合は全体の約4割（近藤：42.1%、McClellan：40.8%）を占めていた。また、統計分析の結果、この技法は極めて高い確度（調整済み標準化残差 9.23）で読者を Minimization の段階へと導くことが示されている。なぜ、文学翻訳においてこれほどまでに定訳への置き換えが選好されるのか。そして、その選択が異文化受容の観点から持つ意味について考察する。

第一の要因として、辞書という「客観的な権威」の存在が挙げられる。Established equivalent は、辞書や用語集によって既に対訳として認知されている語彙を用いる技法である。翻訳者にとって、辞書にある訳語を選択することは、誤訳のリスクを回避し、翻訳の正当性を担保する安全な戦略である。特に『こころ』のような正統的な文学作品においては、奇をてらった訳語よりも、アカデミックに確立された語彙が好まれる傾向にあると考えられる。また、近藤 (1941) の翻訳が先行し、McClellan の翻訳 (1957) がそれに続くことを考慮すると、興味深い循環が見えてくる。先行する優れた翻訳が「定訳」としての地位を確立し、後の辞書編纂や語彙選定に影響を与える。そして、その辞書に依拠した後続の翻訳が、さらにその定訳を強化する。こうした相互補完的な循環を経て、現代の辞書は膨大な数の優れた翻訳の蓄積による集合知として機能していると推測される。

こうした定訳への依存は、翻訳実践としては合理的である。しかし、異文化理解という観点から見た場合、この「定訳」への依存は問題を含んでいる。それは「等価の幻想」とも呼ぶべき現象である。Established equivalent によって選ばれた訳語は、あくまで言語的なレベルでの等価性が保証されているに過ぎず、その語が内包する文化的・情緒的なニュアンスは、しばしば等価性を欠くためである。本研究で分析した「書生」の事例はこの問題を端的に示している。両訳者はこれを「student」という英語圏で確立された定訳へと置き換えており、翻訳技法は Established equivalent、DMIS は Minimization に分類された。辞書的にこの選択は妥当であり、読者も違和感なく受容できる。しかし、明治期の「書生」という言葉には、単に「学校で学ぶ人」という属性を超えた意味がある。他家に寄宿して家事を手伝いながら勉

学に励むという特有の生活様式や、立身出世を目指す若者特有の社会的モラトリアムといった、当時の日本固有の文脈が色濃く反映されているのである。これを「student」と訳すことは、そうした文化的・歴史的背景を削ぎ落とし、「学ぶ人」という普遍的かつ一般的なカテゴリへと希薄化させる行為に他ならない。

つまり Established equivalent は、形式上は等価性を謳っているが、機能としては、異文化の特殊な概念を自文化の既知の枠組みへと同化させる役割を果たしている場合もある。読者は student という言葉を通じて物語をスムーズに理解するが、それは原語の「書生」が持つ文化的固有性が透明化された結果として成立している理解に過ぎない。定訳の多用によってもたらされる Minimization の支配は、読者を混乱から守る一方で、深い異文化体験の機会を制限している可能性がある。

5.4 翻訳技法の選択に見られるアプローチの差異

こうした全体傾向の中で、両訳者には興味深い差異も観察された。両訳者の翻訳技法選択には高い類似性が見られたものの、情報の増減に関わる技法においては対照的な傾向が観察された。具体的には、近藤は Amplification の使用率（7.2%）が相対的に高く、McClellan は Reduction の使用率（12.5%）が高いという点である。この定量的な差異は、両訳文が志向する「情報の粒度」と「読みやすさのバランス」が異なっていることを示唆している。

英文学者として原文の意味構造を深く理解する立場にあった近藤の訳文には、原語の文脈を言語化して補足する傾向が見られる。近藤の翻訳では、原文に含まれる文化的要素に対し、単なる定訳の提示に留まらず、その意味や背景を加筆（Amplification）によって明示化する事例が散見された。このアプローチは、ハイコンテキストな日本文化の要素を、読者が論理的に理解（Adaptation）できるように情報の解像度を高めようとする、記述的・解説的な志向が強いと解釈できる。

対照的に、日本で育ち二言語に精通していながらも、翻訳者としては英語圏の読者への訴求力を重視した McClellan の訳文には、英文としての流暢さを優先する傾向が見られる。McClellan のデータにおいて Reduction の割合が高いことは、彼自身が日本文化を熟知していながらも、物語の主筋に直接関与しない細部の文化的要素や、英語の文脈において冗長となりうる情報をあえて整理する判断がなされた結果と考えられる。このアプローチは、個々の語彙の厳密な説明よりも、英語の小説としての自然な流れや読者の没入感を維持することを重視した、流暢性志向の表れであると推測される。

もちろん、こうした差異は翻訳者個人の文体的な好みや、翻訳された時代の規範にも影響されるものである。しかし、結果として近藤訳は読者に深い文化理解（Adaptation）の機会をより多く提供し、McClellan 訳はスムーズな読書体験（Minimization/Denial）を提供するという、異なる読書体験を創出している事実は、4.1.2 項の DMIS 分析の結果とも合致している。この両者の差異は、次節で論じる翻訳における根本的なトレードオフの異なる解決策として理解できる。

5.5 「読みやすさ」と「異文化理解」のトレードオフ

本章での考察を通じて、翻訳における戦略的決定が、二律背反する要素のバランスの上になり立っていることが明らかとなった。最後に、本研究の総括として、「読みやすさ（没入感）」と「異文化理解（学習）」の間に存在するトレードオフの関係性について論じる。

第4章の統計分析（4.2.2 項）では、読者を深い異文化理解である *Adaptation* の段階へ導くためには、戦術として *Amplification*（加筆・注釈）の介入が不可欠であるという結果が示された。しかし、小説というテキスト形式において、この *Amplification* は「諸刃の剣」である。注釈や詳細な説明的加筆は、必然的にテキストの分量を増大させる。また、注釈への参照は読者に視線の移動を強いることになり、物語世界への没入（*Immersion*）を物理的かつ認知的に中断させる要因となる。すなわち、読者に深い理解を提供しようとするればするほど、小説本来の機能である「物語への没入体験」は阻害されるという、負の相関関係が存在するのである。

したがって、作中に登場するすべての異文化要素に対して *Adaptation*（深い理解）を目指すことは、翻訳戦略として現実的ではない。もし全ての文化的語彙に詳細な注釈が付与されれば、そのテキストはもはや小説ではなく、注釈だらけの「文化人類学の教科書」へと変質してしまうだろう。読者は異文化を学び取ることはできるかもしれないが、物語を楽しむという本来の目的は著しく損なわれることになる。

このことから、翻訳者には「コストと利益の戦略的配分」が求められると言える。翻訳者は、読者の認知的リソース（注意の容量）を有限な資源として管理しなければならない。物語の流れを優先し、読者の負担を最小限に抑えるべき箇所では、*Minimization*（定訳）や *Acceptance*（借用）を選択して「読みやすさ」を確保する。一方で、物語の核心に関わる重要な文化的要素においてのみ、敢えて没入感を犠牲にするコストを支払ってでも、*Amplification* を用いて「深い理解」を取りに行く。つまり、優れた翻訳とは、全ての要素を完璧に理解させることではなく、この「没入」と「理解」の天秤を、作品の性質やターゲット読者に合わせて最適化するプロセスの結果であると定義できる。

前節で触れた近藤と McClellan の差異も、このトレードオフに対するスタンスの違いとして再解釈できる。近藤が *Amplification* を多用したのは、多少の没入感を犠牲にしても「理解」の利益を最大化しようとした結果であり、McClellan が *Reduction* を優先したのは、「理解」の深さよりも「没入」の維持にコストを割いた結果であると考えられる。どちらのアプローチが優れているかという優劣の問題ではなく、翻訳者が「読者にどのような体験を提供したいか」という戦略的意図に基づき、トレードオフのバランスをどこに設定したかの違いこそが、翻訳の多様性を生み出しているのである。

6. 結論

6.1 研究の総括

本研究では、夏目漱石の『こころ』の二種類の英訳を対象に、Bennett の DMIS と Molina

& Albir の翻訳技法分類を統合した分析を行うことで、翻訳者の「戦略（読者にどのような文化体験を提供するか）」と「戦術（どの技法を選択するか）」の相関関係を定量的に明らかにした。分析の結果、第一に、文学翻訳における支配的な規範として **Minimization** が存在することが確認された。両訳者ともに約 7 割の文化的要素を **Established equivalent** や **Generalization** を用いてターゲット文化の既知の概念へと同化させており、これは小説という媒体において「物語への没入感」が最優先されることを示唆している。第二に、読者をより深い異文化理解である **Adaptation** へ導くためには、戦術として **Amplification** の介入が統計的に不可欠であることが実証された。他の技法では読者の理解は表層的な差異の認知（**Acceptance**）に留まりやすく、文化の厚みを伝えるためには、翻訳者が能動的に情報を補填する必要があることが明らかとなった。

6.2 本研究の理論的貢献

本研究の最大の貢献は、従来、翻訳者の感性や暗黙知として処理されてきた文化的要素の翻訳プロセスを、戦略的なトレードオフに基づく意思決定モデルとして体系化した点にある。提示したフレームワークは、翻訳技法を単なる言語変換のパターンとしてではなく、読者の認知状態（DMIS）を制御するための機能的なツールとして再定義した。これにより、翻訳者は「なぜその技法を選ぶのか」という問いに対し、「読みやすさを確保して没入させるため（**Minimization** 戦略）」あるいは「没入を中断してでも文化を学ばせるため（**Adaptation** 戦略）」という、明確な目的意識に基づいた説明が可能となる。また、近藤と McClellan の比較分析において示されたように、翻訳の差異を優劣ではなく「没入と理解のコスト配分の違い」として説明できたことは、翻訳評価研究における新たな視座を提供するものである。優れた翻訳とは、絶対的な正解が存在するものではなく、対象読者と目的に応じて「読みやすさ」と「異文化理解」のバランスを最適化した結果であるという結論は、今後の翻訳教育や実務において実践的な指針となり得る。

6.3 今後の課題

本研究にはいくつかの課題が残されている。第一に、技法判定の基準とした「辞書」の通時的な変化である。本研究では **Established equivalent** の判定基準として現在の辞書記述を採用したが、言語の意味や定訳の地位は時代とともに変容するものである。普遍的な技法分類を確立するためには、辞書の出版年代や語彙の歴史的変遷を考慮した、より動的な判定基準の検討が必要となるだろう。第二に、ジャンルによる一般化の可能性である。本研究の結果（**Minimization** の優位）は、現実世界を舞台とした近代文学（『こころ』）というジャンルの特性を強く反映している可能性がある。例えば、架空の世界観構築が重要となるファンタジー文学や、情報伝達を主とする実用文など、異なるテキストタイプにおいても同様の戦略と戦術の相関が成立するかは、今後の検証課題である。しかしながら、本研究が構築した「戦略と戦術の相関モデル」自体は、言語ペアや時代を超えて応用可能な汎用性を有している。今後、より多様なテキストへの適用を通じて本モデルが洗練され、異文化コミュニケーション

ンとしての翻訳のメカニズム解明に寄与することを期待する。

参考文献

一次資料

夏目漱石. (1914). 『こゝろ』. 岩波書店.

Natsume, Soseki. (1941). *Kokoro*. (I. Sato, Trans.) Hokuseido Press.

Natsume, Soseki. (1957). *Kokoro*. (E. McClellan, Trans.) Regnery Publishing.

二次資料

Bennett, M. J. (1986). A Developmental Approach to Training for Intercultural Sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, 10(2), 179-196.

Bennett, M. J. (1993). Toward ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R.M. Paige (Ed.), *Education for the intercultural experience* (2 ed., pp. 21-71). Intercultural Press.

Díaz Cintas, J., & Remael, A. (2007). *Audiovisual translation: Subtitling*. St. Jerome Publishing.

Ericson, S. J. (2001). Literature in the Japanese History Classroom. *Education About Asia*, 6(1), 48-51.

GRAS グループ. (n.d.). 英和辞典・和英辞典 - Weblio 辞書. Retrieved 1 15, 2026, from 英和辞典・和英辞典 - Weblio 辞書: <https://ejje.weblio.jp/>

Molina, L., & Hurtado Albir, A. (2002). Translation techniques revisited: A dynamic and functionalist approach. *Translators' Journal*, 47(4), 498-512.

Newmark, P. (1988). *A textbook of translation*. Prentice Hall International.

Reiß, K., & Vermeer, H. (1984). *Grundlegung einer allgemeinen Translationstheorie*. Niemeyer.

Reiß, K., & Vermeer, H. (2014). *Towards a General Theory of Translational Action: Skopos Theory Explained*. (C. Nord, Trans.) St Jerome.

Ryan, M.-L. (1991). *Possible Worlds, Artificial Intelligence, and Narrative*. Indiana University Press.

Venuti, L. (1995). *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. Routledge.

Vinay, J.-P., & Darbelnet, J. (1958/1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation*. (B. John, Ed., J. C. Sager, & M.-J. Hamel, Trans.) John Benjamins Publishing Company.

瀬上和典. (2018). 機械翻訳の限界と人間による翻訳の可能性. *AGLOS: Journal of Area-Based Global Studies, Special Issue: Workshop and Symposium 2016-2017*, 1-24.

付録: 『こころ』第一部の文化的要素とその翻訳・翻訳技法・DMIS の一覧

文化語	文化的要素 の対応訳 Kondo	文化的要素 の対応訳 McClellan	翻訳技法 _Kondo	DMIS Kondo	翻訳技法 McClellan	DMIS McClellan
先生	sensei	Sensei	Amplification	Adaptation	Amplification	Adaptation
鎌倉	Kamakura	Kamakura	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
書生	student	student	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
端書	asked me to come	insistence	Reduction	Denial	Reduction	Denial
畷	a long lane between the rice-fields	across rice fields	Description	Minimization	Description	Minimization
二十銭	twenty sen	twenty sen	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
藁葺	straw-thatched houses	thatched cottages	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
都会人種	town people	なし	Literal translation	Minimization	Reduction	Denial
避暑	なし	なし	Reduction	Denial	Reduction	Denial
銭湯	public bath	a public bath	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
掛茶屋	bathing-booths	tea houses	Adaptation	Minimization	Established equivalent	Minimization
西洋人	foreigner	Westerner	Generalization	Minimization	Established equivalent	Minimization
掛茶屋	the booth	tea house	Generalization	Minimization	Established equivalent	Minimization
浴衣	yukata	a Japanese summer dress	Amplification	Adaptation	Description	Acceptance
猿股	short drawers	a pair of drawers	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
由比ヶ浜	Yuigahama	Yuigahama	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
猿股	exposing his body	lightly clad	Generalization	Denial	Generalization	Minimization
手拭い	towel	towel	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
遠浅	なし	なし	Reduction	Denial	Reduction	Denial
麦藁帽	straw hat	straw hat	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
白紬	shirogasuri yukata	なし	Amplification	Adaptation	Reduction	Denial
兵児帯	hekoobi	なし	Amplification	Adaptation	Reduction	Denial
鎌倉	Kamakura	なし	Borrowing	Acceptance	Reduction	Denial

下女	maid	maid	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
名刺	なし	card	Reduction	Denial	Generalization	Minimization
雑司ヶ谷	Zoshigaya	Zoshigaya	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
仏	grave	grave	Adaptation	Minimization	Adaptation	Minimization
楓	mapletrees	maple trees	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
茶店	restingbooth	tea house	Description	Minimization	Established equivalent	Minimization
一切衆生悉有仏生	"All living things possess the quality of Buddha"	All living things bear within themselves the essence of Buddha	Literal translation	Acceptance	Literal translation	Acceptance
塔婆	a stupa	those with Buddhist inscriptions	Established equivalent	Minimization	Description	Minimization
墓標	stones	tombstones	Generalization	Minimization	Established equivalent	Minimization
銀杏	gingko-tree	gingko tree	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
黄葉	turn entirely yellow	a mass of yellow	Description	Minimization	Description	Minimization
鍬	stopped his work	hoe	Reduction	Denial	Established equivalent	Minimization
小春	Indian Summer	Indian summer	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
銀杏	gingko-tree	gingko tree	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
銀杏	gingko-tree	gingko tree	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
空坊主	entirely bare	quite bare	Description	Minimization	Description	Minimization
お墓参り	visit the grave	visit the grave	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
雑司ヶ谷	Zoshigaya	Zoshigaya	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
座敷	fell in with	at his house	Reduction	Denial	Generalization	Minimization
食卓	take supper with him	his house	Description	Minimization	Generalization	Minimization
盃	the cup	cup	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
天罰	nemesis	Divine punishment	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
箱根	Hakone	Hakone	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
端書	postcard	postcard	Established	Minimization	Established	Minimization

			equivalent	on	equivalent	on
日光	Nikko	Nikko	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
紅葉(もみじ)	a maple leaf	maple leaf	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
格子	outside of the entrance-door	なし	Reduction	Denial	Reduction	Denial
袴	hakama	dress trousers	Amplification	Adaptation	Generalization	Minimization
表へ出た	went out	left my room	Generalization	Minimization	Description	Minimization
魚の骨が喉に刺さった時のように	like a fish-bone stuck in my throat	like a fish bone in my throat	Literal translation	Minimization	Literal translation	Minimization
心丈夫	なし	self-reliant	Reduction	Denial	Adaptation	Minimization
横浜	Yokohama	Yokohama	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
新橋	Shinbashi	Shimbashi	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
座敷	drawing-room	なし	Established equivalent	Minimization	Reduction	Denial
敬意	respect	なし	Established equivalent	Minimization	Reduction	Denial
謙遜	modest	modest	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
東京	Tokyo	Tokyo	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
鳥取	Tottori	Tottori	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
江戸	Edo	Yedo, when Tokyo was still known as Yedo	Amplification	Adaptation	Amplification	Adaptation
新潟県人	Niigata, a province far away from either Tottori or Tokyo	from the province of Niigata	Description	Adaptation	Description	Minimization
花時分	spring-time	flower-viewing season	Generalization	Minimization	Description	Minimization
鶯溪	Uguisudani	Uguisudani	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
垣	the hedge	fencing	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
幽邃	solitary and mysterious	なし	Description	Minimization	Reduction	Denial
熊笹	bamboo	dwarf	Generalization	Minimization	Established	Minimization

	clumps	bamboos	ion	on	equivalent	on
雑司ヶ谷	Zoshigaya	Zoshigaya	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
お気の毒	sorry for you	sorry for you	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
気の毒	hesitate to say so	I deserve your sympathy	Description	Minimization	Description	Minimization
椿の花	camellias	camellias	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
座敷	drawing-room	his room	Established equivalent	Minimization	Generalization	Minimization
生垣	hedge	hedge	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
金魚売り	goldfish vendor	goldfish vendor	Literal translation	Minimization	Literal translation	Minimization
針仕事	needle-work or some other feminine task	sewing	Amplification	Adaptation	Established equivalent	Minimization
襖の陰で	behind the sliding-doors	behind the door	Generalization	Minimization	Generalization	Minimization
秋	autumn	the time of the year	Established equivalent	Minimization	Generalization	Minimization
肌寒い	chilly	なし	Established equivalent	Minimization	Reduction	Denial
煙草を飲む	smoking	to smoke	Generalization	Minimization	Generalization	Minimization
茶の間	sitting-room	morning room	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
下女	maid	maid	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
鹿爪らしく	formally	stiff and serious	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
長火鉢	oblong brazier	long brazier	Established equivalent	Minimization	Literal translation	Minimization
鉄瓶	iron tea-kettle	iron kettle	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
空の盃	empty cups	empty saké cups	Literal translation	Minimization	Literal translation	Acceptance
献酬	offering and taking	forever exchange empty saké cups with one another	Description	Minimization	Description	Acceptance
春の雲	clouds of spring	cloud in the spring sky	Literal translation	Minimization	Established equivalent	Minimization
下女部屋	servant's room	maid's room	Literal translation	Minimization	Literal translation	Minimization
水注	なし	jug	Reduction	Denial	Generalization	Minimization

鉄瓶	iron kettle	iron kettle	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
下女	maid	maid	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
西洋菓子	cakes	cakes	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
鳶色	なし	なし	Reduction	Denial	Reduction	Denial
繻絆	juban	be more careful in my dress	Amplification	Adaptation	Description	Minimization
五徳	on it	on it	Generalization	Minimization	Generalization	Minimization
金盥	basin	A metal basin	Generalization	Minimization	Established equivalent	Minimization
茶箆笥	cabinet	returned	Generalization	Minimization	Reduction	Denial
胡座	cross-legged	sitting up in bed	Established equivalent	Minimization	Generalization	Minimization
不承無性	reluctantly	なし	Established equivalent	Minimization	Reduction	Denial
九州	Kyushu	Kyushu	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
正月	January	January	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
上京	returned to Tokyo	returning to Tokyo	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
東京	Tokyo	Tokyo	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
椎茸	dried mushrooms	dried mushrooms	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
将棋盤	Japanese chess	chess	Generalization	Minimization	Generalization	Minimization
炬燵	the warm sunken fireplace with its wadded covering	a footwarmer between us and a large quilt covering the footwarmer and our bodies from the waist down	Description	Minimization	Description	Minimization
櫓	quilt	なし	Reduction	Denial	Reduction	Denial
火箸	the tongs	a pair of tongs	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
碁	go	go	Amplification	Adaptation	Amplification	Adaptation
金	なし	なし	Reduction	Denial	Reduction	Denial
香車	なし	なし	Reduction	Denial	Reduction	Denial
将棋	chess	chess	Adaptation	Minimization	Adaptation	Minimization
儒者	Confucian's	Confucianist	Established	Minimization	Established	Minimization

			equivalent	on	equivalent	on
切支丹	Christian	Christian	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
松飾	New Year's decorations	New Year decorations	Generalization	Minimization	Generalization	Minimization
正月	New Year	New Year spirit	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
好事家	collector	curio-hunter	Established equivalent	Minimization	Description	Minimization
骨董	curios	curio	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
敷居を跨がなかった	call on	did not visit	Generalization	Minimization	Generalization	Minimization
八重桜	double cherry-blossoms	double cherry blossoms	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
初夏	at the beginning of summer	the beginning of summer	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
枳殻	aegle sepiaria	quince hedges	Established equivalent	Acceptance	Adaptation	Minimization
柘榴	pomegranate -tree	pomegranate trees	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
躑躅	azaleas	azaleas	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
霧島	kirishima	Kirishima	Amplification	Adaptation	Amplification	Adaptation
芍薬	peonies	peonies	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
十坪	about twenty feet square	ten tsubo	Established equivalent	Minimization	Amplification	Adaptation
杉苗	young cedars	cedar saplings	Literal translation	Minimization	Literal translation	Minimization
熊笹	bamboo clumps	dwarf bamboos	Generalization	Minimization	Established equivalent	Minimization
三坪	eleven feet square	a small patch of ground	Established equivalent	Minimization	Generalization	Minimization
褁口	purse	purse	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
五銭	five sen	five-sen	Borrowing	Acceptance	Borrowing	Acceptance
斥候長	a scout-master	chief of the army scouts	Literal translation	Minimization	Literal translation	Minimization
楓	maples	maple leaves	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
縁日	a local fete	fair	Adaptation	Minimization	Established equivalent	Minimization
不徳義漢	wicked	scoundrels	Generalization	Minimization	Generalization	Minimization
行李	a baskettrunk	suitcase	Description	Minimization	Adaptation	Minimization

厚羅紗	wool which did not allow the slightest ventilation	thick wool	Description	Minimization	Generalization	Minimization
箸	hashi	chopsticks	Amplification	Adaptation	Established equivalent	Minimization
茶碗	bowls	bowls	Generalization	Minimization	Generalization	Minimization
着物	his dress	clothes	Generalization	Minimization	Generalization	Minimization
盃	These word	The gesture	Description	Minimization	Description	Minimization
杯	cup	saké cup	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Acceptance
アイスクリーム	ice-cream	homemade ice cream	Established equivalent	Minimization	Amplification	Minimization
水菓子	fruit	なし	Established equivalent	Minimization	Reduction	Denial
団扇	fan	fan	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
古本屋	a second-hand book seller	secondhand bookshop	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
縁起でもない	Please don't do it any more.	It's unlucky to talk like that.	Adaptation	Denial	Established equivalent	Minimization
木犀	fragrant olive	osmanthus tree	Established equivalent	Minimization	Established equivalent	Minimization
田舎者	countrymen	country people	Established equivalent	Minimization	Literal translation	Minimization
丸善	Maruzen	Maruzen Bookshop	Borrowing	Acceptance	Amplification	Acceptance